



## 学会印象記

# The 6th Annual Meeting of the Society for the Neurobiology of Language (SNL) 2014

(2014年8月27~29日, アムステルダム)

山本香弥子\*, 酒井邦嘉\*

2014年8月27~29日にオランダのアムステルダムで開催された The 6th Annual Meeting of the Society for the Neurobiology of Language (SNL) 2014 に参加しました。SNL はアメリカ国立衛生研究所 (NIH) の出資により 2010 年に誕生した学会で、言語の神経生物学的な基盤の理解を促進することを目的としています。特に分野横断的な議論を深めるために、年次大会では領域の異なる関連分野からの基調講演を行うなどの工夫がなされています。

年次大会は北米とヨーロッパで交互に開催されていますが、今年も 500 人以上の参加者が一堂に会しました。8 月末のアムステルダムは涼しくて過ごしやすく、また時差が 7 時間あるものの現地の早朝が日本のお昼くらいに相当しますので、朝からのセッションでもすっきりとした頭で参加できたように思います。会場はアムステルダム中央駅にほど近い旧証券取引所 (Beurs van Berlage) で、交通の便がよいことに加え、周囲に運河があることから学会主催のボートツアーが開催されるなど、研究者同士が交流を深めるのに適した開催場でした。

今回のオーガナイザーはマックス・プランク研究所の Peter Hagoort でした。オープニングでは、オーガナイザー自身がオランダの街を歩きながら学会の趣旨を紹介するビデオが軽快な音楽とともに流され、和やかな雰囲気での開幕となりました。今回は 60 分の基調講演が 4 セッション、90 分のパネルディスカッションとシンポジウムがそれぞれ 1 セッションありました (写真 1)。加えて各演題 20 分の口頭発表が計 16 題、2 時間のポスター発表が計 415 題と充実していました (写真 2)。分野も音声知覚、発話、文字処理、言語発達、語彙意味、

談話、文法、言語障害など多岐にわたりました。また、女性の参加者が非常に多く、男性の参加者もお子さんと一緒に参加されている姿が見られました。

昼食は学会会場でふるまわれ、さらに午前と午後に一度ずつコーヒーブレイクの時間も定められていたため、飲み物を片手に議論を交わす光景が至るところで見られました。本学会では研究分野が多岐にわたることに加え、用いる計測手法も磁気共鳴画像法、脳磁図や脳波など複数存在します。このため気軽に議論を深める機会が多くあったのは、これらの手法を融合的に利用しさらに分野全体を発展させていくうえで重要であったように思います。私達は 3 日目午後にポスター発表を行いました。さまざまな研究者に興味を持っていただき、研究へのアドバイスから関連する研究についての議論まで、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

1 日目には、マックス・プランク研究所の Willem Levelt による基調講演がありました。開催国オランダにちなみ、レンブラントの「テュルプ博士の解剖学講義」の絵から始まり、機能局在論と全体論がどのような歴史的変遷をたどってきたかが詳しく紹介されました。さまざまな仮説が出されては修正され、少しずつ分野全体が進化する過程を俯瞰することができ、現代のわれわれの研究姿勢にもつながる講演でした。

2 日目には、ベルリン自由大学の Constance Scharff による、鳥の音声学習についての基調講演がありました。鳥の歌と人間の言語は大きく異なりますが、一方で音声に関わるネットワークについては類似する部分も多くあると考えられ、動物を対象とすることで可能となる遺伝子改変などの手法を用いた研究が紹介されました。

\* 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻相関基礎科学系 (〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1)

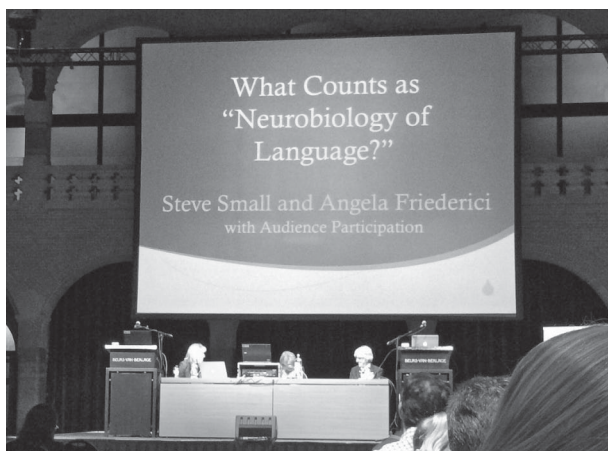


写真1 パネルディスカッション



写真2 ポスター会場

午後には「自然な言語使用の神経生物学とは」というテーマのシンポジウムが開催され、4人の登壇者が発表しました。言語の神経生物学では、仮説の検証に最も適した実験課題を作成することが一般的です。日常会話で見られるような「自然な」言語使用を対象として実験的な研究が可能だろうかという点について意見が述べられましたが、会場からは「十分に統制されていない実験課題では、科学的な検証と呼ぶには不十分ではないか」といった意見が多数上がり、発散的な議論に終始しているように感じられました。

さらに夕方にはエルンスト・ストルングマン研究所のPascal Friesによる基調講演も行われました。サルでの硬膜下皮質表面電位によって計測された神経活動のデータから、脳の局所的な活動によりガンマ波が増大すること、ボトムアップの情報が離れた部位同士のガンマ波の同期によって連絡されることや、一方でトップダウンの情報にはベータ波の同期が必要であることなどが紹介されました。これらの知見の一部は脳磁図を用いて人間でも非侵襲的に検証されており、将来的にさらに研究が広がる可能性を感じました。

3日目にはSNLの創始者の1人であるカリフォルニア大学のSteve Smallと、マックス・プランク研究所のAngela Friedericiによるパネルディスカッションが行われました。「何が『言語の神経生物学』と見なされるか」と題された討論で、登壇者が15分程度それぞれの意見を発表した後に、会場からの意見や質問をもとに議論を進めていく形式でした。テーマが参加者全員に関わるものであったことと、参加型の討論であったことに

より、今回の集会の中で最も活発に意見のやりとりがなされたように思います。

まずSmallは「神経生物学」の面を強調し、言語学や認知科学で提案された仮説を実験的に検証することに終始するのではなく、神経生物学として妥当な仮説を立てるところから研究を開始すべきという意見を述べました。一方でFriedericiは、現在広く用いられている手法を概観しながら、それぞれの手法で最もよく検証できる仮説を、言語学や心理学での知見を取り入れながら検討していくべきという意見を述べました。その後の討論では、言語の神経生物学から得られた知見、動物を対象とした研究から得られた知見、さらには言語学などからの知見を融合させるべきという意見などが出されました。

大会最後は、日本でも著書の翻訳が発行されているマックス・プランク研究所のMike Tomaselloによる基調講演で、神経生物学というよりは人間や動物の行動からコミュニケーションの基盤を明らかにしようとする試みが紹介されました。以上4つの基調講演を通して、分野横断的な議論を深めるという学会の姿勢がよく反映されていたように思います。

2015年の年次大会は、米国シカゴで10月14～16日に開催予定です。今回は日本からの参加者は少数でしたが、特にさまざまな分野が融合的に研究を進めていくことが必要な分野だと思いますので、神経科学、言語学、心理学など広い分野から、より多くの研究者が参加することが期待されます。